

里地通信 4月号

発行：里地ネットワーク事務局 〒105-0003 東京都港区西新橋1-17-4西新橋Y Kビル6階（財）水と緑の惑星保全機構内
電話：03-3500-3559 FAX：03-3500-3841 e-mail：QWS04137@nifty.ne.jp ホームページ：<http://member.nifty.ne.jp/satochi/>

連載：幹事紹介⑩ 環境・食料・教育問題の一体解決を

千賀裕太郎（せんが ゆうたろう）
東京農工大学農学部教授

現在の私の最大の関心事は、農業と農村の行方です。
つまり…

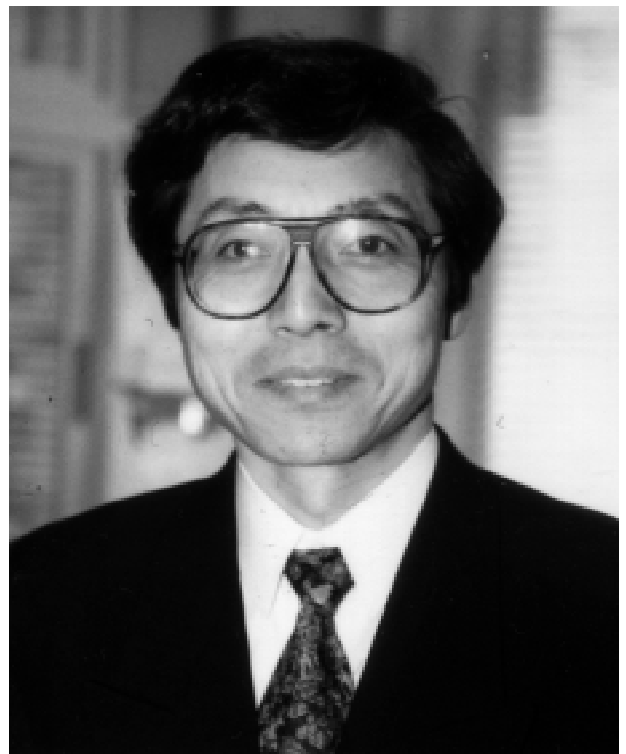
21世紀の初頭には、環境・食料・教育が最大の課題になるに違いありません。

その兆は、地球レベルでも地域レベルでも、明らかになっています。にもかかわらず、20世紀の価値観や既得権が尾を引いていて、有効な手を打ち得ていないのが現状ではないでしょうか。

重要なことは、これらの3課題が、おのおの別個の形で解決されるのではなく、各地域において一体的に解決されなければならないということです。この“一体解決”なくして根本的な解決はないのですが、20世紀型の社会システムは、これが非常にやりにくい形になっているのです。その最たるものがよく指摘される“縦割り行政”ですが、問題は、そうしたことが常態になっていて“一体解決”の発想さえも出にくいことではないでしょうか。

学問のレベルでも同様です。20世紀に入ってから科学技術の発展は目覚ましいものがありました。しかし、科学はそれ自体の自己運動として細分化を極度に進め、多くの研究者は狭い学会の内部で評価されやすい手法と対象を求めて社会の現実から離れた分野での研究に埋没してゆきました。あるいは十分な価値観による裏付けなしに、経済的利益の得られる分野に研究テーマが誘導される、という現象も顕著になりました。こうしたことが、環境・食料・教育といった、これま

で経済的な誘引力の乏しい、かつ広領域をカバーすべきテーマがなおざりになってきた要因の一つになって



います。

“一体解決”はもちろん容易なことではないように見えますが、大きな戦略をたてることでぜひとも可能としてゆかなければなりません。

私が“一体解決”を標榜するのは、3つの課題がそれぞれ密接に関連しているからです。

環境を切り口に考えてみますと、地球上の人工的な土地利用として最も大きな面積をカバーしているのが

人類に食料を提供する農林水産業です。この在り方を“環境保全型”に変えない限り、真の地球環境の保全はあり得ません。それには2つの側面があります。一つは農法の転換と、もう一つは食料の分配の在り方の転換です。前者は主として自然科学系の課題ですが、各地域での環境保全型農法への誘導策や規制策等はすべて社会科学系の課題です。後者は主として社会科学系の課題ですが、地球上の各地での気象状況等からの食料需給予測や効率的な輸送システム等の開発は自然科学系の課題です。

実はこれに教育問題がやみがたく絡んできます。

そもそも人間も数万年前には野生生物に近い存在だったのです。そのころは、人類は植物の採集や動物の狩猟で食料を得ていましたが、次第に脳を発達させながら、農業の創造へとゆっくり準備を進めていました。われわれの遺伝子は、それ以来ほとんど変化していないといわれています。約1万年前から人類は農林業を開始し、少なくとも日本においては100年ほど前まで持続可能な水田農業を中心とした食糧生産が安定的に実現していたのです。そこでは、人口の大半が農の現場と接しつつ、暮らしておりましたし、子ども達も農の空間の中で育ってきたという事実があります。

ところが今日、たかだか100年程度にすぎない現代の都市文明の中で、日常の異質な環境・行動から受ける強烈なストレスが、人間をその環境適応能力の極限に追い込んでいるのだと考えられます。学級崩壊に象徴される学校教育の現場で起きている多くの問題は、大きくいえば、数万年前このかた人類が保持してきた人間の子供が本来育つための条件を、家庭、学校、そして地域社会がほとんど失いかけていることからくるものではないでしょうか。その条件とは、“育つに十分な時間”“育つにふさわしい空間”“育ちを支援する人間”の3つに集約されます。今日、このいずれもがさまざまな要因でひどくいびつになっています。これに加えて、ダイオキシン等の環境ホルモン（農林水産業由来のものが多いです）が作用して子供が産まれにくくなるなどということは、人間社会の再生産に困難をきたしているということであり、人類史上ゆゆしき事態といわなければなりません。

しかし、30～50年前の日本社会は、先述のとおり、まだ子ども達には“育ちの時間”がたっぷりあって、農業は自然と共生の関係を保っており、農業の現場も

ほとんどの都市の内部や周辺にも存在しているために、そこは子ども達に“育ちの空間”を豊かに提供していたのです。いま日本社会がようやく、教育問題を早急かつ根本的に解決すべき優先課題の一つと認識するようになってきました。そして“育ちの空間”として農の現場が再定義されて行くと思います。農村としても、“育ちの空間”としてふさわしい農の空間を、あらためて考えなければなりません。それには、これまでの化学肥料と農薬に依存した農法を抜本的に転換することが迫られることはいまでもありません。

もちろん国民の農村への関心は教育問題だけではありません。安全で栄養価の高い美味しい農産物の生産の場として、さらにはリクリエーションの空間として、心とからだの癒しの空間として、農作業や炭焼きなどへの参加を通じて自己実現の場として、そして空気や水の浄化・供給空間として、実に多面的な価値を有する空間として認識し、その実現を求めて国民が行動するようになります。これらの行動は、農業を学び、環境を学ぶ国民的な学習運動となり、人間の行動を通じて環境・食料・教育の3課題が上昇の循環系に乗り、一体解決の条件がつくられることになるでしょう。

さて、以上のような認識のもと、大学という教育・学問の府に対する私は、一体何をしているのかといえ、地域（概ね市町村域または一つの河川流域）を対象として、環境、農業ないしは地域管理に関する具体的な問題解決の手法の開発に取り組んでいます。

例えば、“春の小川の復活”という課題です。“春の小川”というのは、同名の童謡の歌詞からわかるように、水田の間を流れる農業用水路なのです。農家のかたがたが、毎年何回も清掃をし、大切に利用・管理してきた水路なのですが、近年その手間がかけられなくなり、コンクリートに変わるというところが増えてきました。こういう事情のなかでドジョウやメダカが泳ぐ“春の小川”を復活させるには、多くの側面からの解明が必要であるとともに、水路という“複雑系”の問題を解決するために、細分化されてしまった諸科学の再統合が必要なのです。そこで、生態学や生物学の最新の知識、川の水質・水温といった科学的な知見、護岸や水路底の材質といった土木工学的手法、生態・生物情報と土地情報等を連携させる情報工学のシステム技術等を有機的につなぐ新たな科学（地域科学、総合科学）の創造に取り組んでいます。

また、慣行農法から環境保全型農法への転換には、農業技術のワンセットの革新が必要で、このための一翼を担う、有機質資源（家畜尿、稲ワラ、おが屑、農産物加工残渣、家庭生ゴミ等）の堆肥化リサイクルの地域計画手法の開発に取り組んでいます。

さらに、住民参加の地域計画手法の実践的な調査研究の一つの帰結としての、グラウンドワークトラスト等の新たな社会システムの創造をめざす活動や、こうした地域での運動を多くの専門家等が支援する里地ネットワークの活動も、私の大事な活動分野です。

これらは、トータルとして、美しい田園景観形成の基礎的な技術・手法を提供するものです。私の大好きなドイツやイギリスの田園に勝るともおとらない、日本の農村に固有の景観美とそこでの新たなライフスタイルの実現を夢見て、教育と研究を、そして地域づくりへの支援を続けて行きたいと考えています。

略 歴

昭和23年、北海道生まれ。東京大学農学部卒業後、農林省に8年間勤務。宇都宮大学助手を経て、東京農工大学農学部地域生態システム学科教授。

現在、他の役職として、(財)日本グラウンドワーク協会理事、国土審議会専門委員（国土庁）、水利制度研究会委員（建設省）、朝日農業賞中央審査委員（朝日新聞社）、中央放送番組審議会委員（NHK）、河童連邦共和国副大統領。

主な著書：水資源のソフトサイエンス（鹿島出版会）、水を育む（農文協）、よみがえれ水辺・里山・田園（岩波ブックレット No.364）、地域資源の保全と創造（共著、農文協）豊かで美しい地域環境をつくる（共著、農業土木学会）、道と小川のビオトープづくり（共監訳、集文社）、水と土に恵まれて（写真集、共編著、公共事業通信社）など

お知らせとお願い

里地通信への寄稿のお願い

昨年度1年間、各地の取り組みを見させていただき、いくつかの取り組みに関して、事務局より紹介させていただきましたが、今年度は会員の皆様の活動を、『里地通信』を通じて、また、里地ネットワークで定期的に原稿を書かせていただいているメディアへ、直接取り組みを紹介させていただきたいと考えています。

そこをお願いですが、皆様の活動紹介の写真、文章を、事務局宛にお送りください。

完全原稿でなくても結構です。いただいた原稿をもとに事務局で、手を加えることもできます。また、参加者募集や、専門的な知識募集など、募集項目があればさらに、面白いものになると思います。形式は問いません、皆様の原稿をお待ちしています。

小学館「田舎で休日」の体験学校取材先候補の募集

小学館の平野編集長（個人会員）が、プロデュースされている本の一つに3月15日書店に並んだ『田舎で休日』というムックがあります。事務局では「田舎となかよくなる法」という文章を書かせていただいたことと、「山形のさくらんぼ農家の鈴木さんの農業体験の募集」や「三重県名張のエコリゾート赤目の森の飯井野さんの里山体験」を始めとして、いくつかの地域を紹介させていただきました。このムックの夏号の出版日は、6月10日前後（取材は4月10日ごろが中心）、次号の特集は「夏休みおもしろ体験学校」と「島」、そして「信州」です。この本の中に紹介したい内容、体験学校のプログラム等ありましたら、大至急、事務局までお知らせください。取り急ぎ、編集部につなぎたいと思います。大至急です！

環境保全型里地づくり報告 グスコブドリのまちづくり ー岩手県東山町ー

里地ネットワークでは、里地ネットワークの会員である岩手県東山町において、明確なコンセプトのある地域づくりの実態に関する調査事業を行いました。詳細は別途報告書を作成中ですが概要をまとめましたのでご参考にしていただければと思います。

岩手県東山町「グスコブドリのまちづくり」の情報拠点となる「太陽と風の家」は、4月1日正式オープンしました。ぜひとも、さまざまなご支援をお願いします。

町の概要

岩手県東山町

JR一関より大船渡線で約30分、東北自動車道一関インターより車で約40分の、比較的平坦で気候温暖な地域。

渓谷美をほこる日本百景の猊鼻渓、3億年以上前のウミユリ等の化石の宝庫、霊玄洞の等たくさんの観光資源がある。

また、清流砂鉄と石灰のまちとして、東北中に知られている。

この地域一帯は、石灰が風に飛ばされ、水に解け込み石灰が流出していることから、周辺の土壌、水質は、石灰分が多いのが特徴。

東山町の人口

9,000人弱で以降徐々に減少しているが、大正から昭和にかけて急激な変化をしていないため、比較的安定的な理想的な里地といういい方ができるかもしれない。

農家戸数は、現在の1000世帯弱で40年ほどの間の変化は少ないが、兼業農家の割合が圧倒的に増加。一関を中心とする2次、3次産業へシフトされてきた。

旧東北砕石工場

土壌改良材の石灰石粉を製造するため、大正13年、鈴木東蔵、鈴木貞三郎によって創業。現在は、三菱マテリアル株式会社に引きつがれている。

昭和4年の春、鈴木東蔵が、病床の宮沢賢治を尋ねて来た。東北砕石工場主で、石灰岩を粉碎して肥料をつくる工場主であったため、賢治としては、この石灰を使って東北の農村に安くて大事な肥料を供給したいと願い、このことが、東蔵の工場の注文同時に増やし、工場で働く農民や労働者の安定にもつながると考えた。昭和5年、宮沢賢治が、肥料用炭酸石灰を「タンカル」と命名。病床から、タンカルの活用を呼びかける広告文を書いたり、工場の拡張計画を作成するなどしていた。病気が快方に向かったのを機に、昭和6年2月、このタンカルで、飢饉に苦しむ東北の農民を救済しようと技師として営業マンとして働くことになった。農民救済のために日々働くなかから「雨二モ負ケヅ、風二モ負ケヅ…」が詠まれた。

「グスコブドリの町」

宮沢賢治を研究している東山賢治の会は、平成7年10月「グスコブドリの町東山」を宣言した。賢治の「グスコブドリの伝記」にでてくるブドリとネリ、それはこどもたちの代名詞。明日の東山を担う子どもたちと、現在に生きる大人たちが、きれいな心を持ち、賢治が理想としたグスコブドリの生き方に学び文化の香りたけよう町を創造し宣言したものだ。

取組の経緯

東山町で昨年、いったん議会を通った宮沢賢治のまちづくりに関する当初案が、町民の要望を受けて凍結、

見直しされるという出来事が起こった。

この事業計画の発端は、賢治生誕100周年の1996年に旧碎石工場が文化庁に、近代化遺産として登録されたところから始まった。町は碎石工場及び、周辺の整備事業を開始した。整備事業の中心は、東北碎石工場を修復し、博物館として保存し、賢治の足跡を展示する計画だった。近代化遺産に登録されていることから、碎石工場内の修復や展示は、最小限度にとどめなければならないことで、当初案では、その隣接地に「太陽と風の家」を開設し、賢治の資料展示を行うこととなっていた。来館対象の見えない公民館的博物館、来場者予測のない施設計画、どこにでもある賢治の資料館になるのではと、賢治を研究する町民から「どこにでもあるような施設では、賢治の理念がまったく感じられない」との疑問の声から翌年6月、開発計画の凍結・見直しが行われることとなった。

この年より、東京から吉成信夫氏が関わり、町長と賢治学者伊藤良二氏をサポートしながら研究会を立ちあげた。吉成氏は、賢治生誕100周年の頃、東山町を訪れたことがきっかけとなり、東山町に移住することとなった。1998年「太陽と風の家」「グスコブドリのまちづくり」に関心を持ち役場のまちづくり専門委員となり活躍している。同年4月、施設の建築が再着工された。

吉成氏の理念は「宮沢賢治の理念を現在から未来へ」「未来のこどもたち、ブドリへ未来を伝えることにある」「自然を愛し、技師として先端技術にも興味を持った賢治が生きていれば、自然エネルギーに関心を持ったと思う」「建てれば終わりではなくその後どうするかまで考えた開発をするには、地元暮らしが考えなければならない、外の人が考えると、気まづくなると直に逃げてしまう」

また、東山賢治の会副会長の伊藤良二氏は、元教員で、賢治に関する東山のことは、知り尽くしているといっても良いほどの研究をされている。

研究会のメンバーにより計画は、全面修正されたが、これが地域内に行き渡るには、内部だけの力では遺憾ともしがたい。

里地ネットワークでは、東山町で行われる代案提示型の事業が順調に推移するよう、外の役割を果たすとともに東山町に調査事業を行った。

情報支援と言う点で検討会において企画に対するア

イデアや参考情報のラッシュを行い、調査をした。また、外の風の役割が有効に働くことを期待している。



太陽と風の家展示品。石は楽器にもなる

取組の現状

旧東北碎石工場跡地の博物館構想と、付帯する施設「太陽と風の家」および茶房は、当初案では、町の人の公民館的な役割と説明されたり博物館と説明されていた。この「箱もの事業」を、昨年全面的に凍結させ構想をソフトから組みあげ必要な施設とソフト運営を中核に据えて、全体の計画を再提案し議会承認を得た。残念ながら施設の基本的な要素、場所、大きさ、機能の変更は行われていないが、オープン後の運営を中心に検討が行われているために、オープン後に、本当の意味での「太陽と風の家」づくりが始まるという言い方が適切であると思う。

今後検討すべき項目

- ・「太陽と風の家」の施設計画建築終了後の運営上最低限陳列すべき基本展示のつめ
- ・「太陽と風の家」周辺における掲示と展示
- ・「太陽と風の家」の運営方法
- ・「太陽と風の家」のオープニングセレモニー
- ・茶房の運営方法
- ・「グスコブドリのまち東山」地域振興の拠点としての役割を担うためのプログラム
- ・「太陽と風の家」の賢治の理念を伝える総合学習プログラム

- ・「グスコブドリのまち東山」のＣＩとパッケージ開発
- ・ 来場者に対する特産品開発と開発グループ
 - ：石っ子賢さんの石の商品開発
 - ：農民芸術概論の賢治の食文化、農産開発
 - ：その他コンセプト開発とものがたりづくり
 - ：茶房のメニュー開発
- ・ 特産品開発にむけた役所のサポート体制
 - ：保険所、税務所申請のサポート
 - ：パッケージデザインとＣＩ、コンセプトサポート
 - ：積極的な人への優先的施設貸出、転用等の便宜（内規による競争原理の導入）

上記項目の内、外の役割のありそうな項目について検討会を開催する方式で調査事業を行った。

まとめ

コンセプト：

「賢治の考えたイーハトーブへ、グスコブドリのまちづくりの始まり」

宮沢賢治が、「肥料用炭酸石灰」を「タンカル」と命名し、このタンカルで、飢饉に苦しむ東北の農民を救済しようと技師として営業マンとして働くことになった。飢えに苦しむ農民救済のために日々働かなかから「雨二モ負ケツ、風二モ負ケツ…」が詠まれた。東北砕石工場は、賢治が命をかけて農民救済のために技師として働いた場であった。ここから、宮沢賢治と東山町の「グスコブドリのものがたり」が生まれることとなった。この経緯を受けて、東山町の町づくりと商品開発を考えると以下のシナリオが見えてくる。少数ではあるけれども宮沢賢治の精神が残っている。この精神を受け継ぐことで、農業、石、人づくり、まちづくりをしていく。賢治の希望と夢を描く町づくり。地域の人の活性化につながるような小さな組織づくりから、みんなの幸せづくりを行う。

太陽と風の家役割は、農業と農産物においては、「農民芸術概論」、食文化においては、「イーハトーブの食べもの帳」、石の商品開発においては、「石の研究

史」をひも解き、東山町民とともに学びながら共有していくこと。ワークショップは、共有の賢治の精神を共有するために行われる手法。そして、その成果は、賢治の考えた「グスコブドリの町」づくりへと、最初は小さくともゆっくりゆっくり、時間をかけて、体験を重ねながら構築していくこと。行政主導型ではない、広告代理店任せでもない、住民自身による人づくりとモノづくり、グスコブドリの町おこしを行うべきです。

ゆっくり、気が付いた人から、賢治の考え方に基づいた種を掘り起こし育てていく。芽が出たら皆で温かく見守り育てて行く。他品目少量の作付けを行い、地域内自給、家庭菜園中心、売ることの喜びを謳歌する農民芸術、農民の暮らしを堪能する生き方。グスコブドリの町は、きっと「小さな宇宙」のように見えるに違いない。宮沢賢治や鈴木東蔵が、再び大きく皆の心の中に生きつくようゆっくり歩み始める。その役割が「太陽と風の家」が担っていくのであろう。

考えるヒントとして：

宮沢賢治の「農民芸術概論」と東山の農業

味噌を造る腕はあっても造らず買う。そうしたら農地も荒れていく。持っている技術は失われていってしまう。こんな農業の現状は、とても悲しい。都会から来た人と一緒に農家を変えていくのが一番ではないのか。包装によって価値を見出すようなことはしたくない。化学肥料を使わず農薬を使わない農業ができる所は少なくなった。東山町は、もう一度農業のあり方を問い直そうとしている。農繁期のグリーンツーリズム、農業体験、山菜採体験、田植踊り、山の神の祭り、農地を維持し、未来へ受け継ぐこと、地域内循環と多品種少量栽培、この為の食文化の見直し。賢治の精神を思い返して、食への感謝と農業への感謝を行う農業、ひいては、子どもたちへ健やかな肉体と精神を引き継ぐことになるのであろう。「農民芸術概論」と「イーハトーブの食べもの帳」は、太陽と風の家が、地域農業とともに学習していく基本書となり、この基本コンセプトの上に、農業と農作物、食文化のひとつひとつに「ものがたり」をつけていく作業である。サポニン、サイカチが、サイカチ沼（賢治の本の中に記載）の物

語にでてくるように、ものがたりを確認し、語り部のように語ることから始めよう。

コンセプト：

「石っこ賢さん」と

石の商品開発と石のワークショップ

ジャスパー石は橋の上から見てみると石が川から流れてくる。紫雲石、蛇紋石、粘板岩、。ロウセキ、賢治が好きだった赤ジャモンもここにある。石っこ賢さんの哲学と東山の石のワークショップ開催することで石の宇宙観を語ることもできる。

石の加工技術は東山にある。オニクス：ショウサンで磨いてつやを出す。穴開け法：ダイヤモンド製のドリルで開ける。ジャスパー：河原で拾えるもの赤いのが特徴。石に絵を描くのは、エナメル（マニユキア）でできる。鉱物探しのフィールドワークの案内役がいる。

岩絵の具、石の標本セット、インテリアの硯。硯の利用は、ペーパーウエイト、インテリアになるような

小さくて重い硯を考える。ろうそく台・アクセサリー・表札等展開はさまざまなだ。石と語り合うワークショップがあれば、賢治が石に魅せられた訳がわかるであろう。石の神秘を知ることが、ここではもっとも大切なコンセプトであろう。

石の楽器を造って演奏会を行う。石っこ賢さん探検隊。地元の石発掘隊。岩絵具。素材を生かし手づくりで体験する。賢治の心を伝えるイラストと東山の石の組み合わせ。石の仕事人だった賢治。国際的な石の展示会が開催される。

理念をマップに描く：

グスコブドリの町のマップを作成する。

東山町内には、JRの駅は、松川、狛鼻溪、柴宿と3駅ある。そして、集落はさまざまな地域性を有し、ことなつた風土を築き上げている。賢治の語り部とともに、集落をもう一度、住民自身が探索し「グスコブドリの町」のマップを作成すると、共に育む賢治の文化あふれる町づくりが始まるであろう。

お知らせとお願い②

地元学のインストラクター養成講座

今年度、三重県市町村会（団体会員）では、三重県職員を対象として、地元学の研修講座を計画中です。この講座へ、事前研修を行った上で、指導員補佐を務めていただける人を募集したいと考えています。興味のある方は、事務局まで、ご一報下さい。正式に決まり次第、優先して連絡を行なわせていただきます。詳細は、5月号で連絡いたします。

里地塾の塾生募集(セミナーボランティア！募集)

里地セミナーの内容に関しては、現在、講師とテーマに関して検討を行っていますが、このセミナーを、運営(事前検討会、記録、撮影、編集、運営)していただける人を、塾生の役割と習得プログラムなどが決定し次第、募集を行う予定です。塾生について関心のある方は、事務局に、お名前の登録をお願いします。内容が決まりしだい詳細についてご連絡いたします。

里地づくりシンポジウム報告

第6回 森の学校・公開シンポジウム

杉と住まいのまちづくり

日時：平成11年2月27日（土）9時～

場所：二ツ井町役場大会議室、松風荘

田中勝昭氏（一級建築士：アトリエあすか）

パネラー：今井俊博、竹田純一、西本金治、鈴木有

1996年夏より開催され今回6回目になった「森で遊び林業を考える学校」。この学校は、二ツ井の営林署、森林組合、製材所、建築家、地元の林業関係者、役場、地域住民とともに、外から来る学校参加者である、設計士、家を建てたいと考えている人、学校の先生、行政、漆や壁の職人、町づくりのコンサルタント、児童生徒など、多くの立場や専門を持った人びとが、集い・交流し・相互に学習することを通じて、「杉」と「住まい」について、そして「まちづくり」について考えるために開催しました。

今回の第6回シンポジウムは、森の学校の趣旨をより多くの地域住民と共有し、これからの町づくり、杉の住まいづくりについて考え、行動する人の輪を、広げていくことを目的にしました。

プログラム

- ・開会挨拶 二ツ井町 丸岡町長
- ・基調講演 「住まうこと、風土と木、土、糸」
今井俊博氏
(有) ユーラシア・クリエイト・ジャパン
- ・参加者報告 「二ツ井で感動したこと」
竹田純一 里地ネットワーク事務局長
- ・参加者報告 「都会に建てた二ツ井の家」
西本金治氏 東京都国分寺市在住・会社員
- ・スライド「二ツ井の伝統的な住まいとまちなみ」
鈴木 有氏 秋田県木材高度加工研究所教授
- ・パネルディスカッション
コーディネーター
加藤長光（モクネット代表）

シンポジウム概要

・丸岡町長

森の学校を通じた林業体験や、今の時代に森を守っていくことの難しさをお互いに学んで認識を深めながら、どうすればもっといい方向に向かうかを学んでいければいいなと思っています。

これまで山里、林業、木材というものは、軽く見られるというか、意に介されないような時代が何十年か続いてきました。しかし最近になりまして、人の心の問題とかが何によって癒されるかということ、いよいよ森とか木とか、そのようなものでないかと救えないような時代になりつつあるのではないかなと感じ始めています。

住宅の建て方にしても、日本古来の木材を大事にした建て方というのは、自分にとっても社会全体から見ても良いことだと思いますし、あるいは森を守っていく面からも非常に意味があります。そんなことをお互いに認識していくことが必要じゃないかなと思います。今日は、いろいろな考え方をされている先生方の集まりなので、大変貴重な話が伺えて一緒に勉強し、さらに輪を広げていければいいなと思っています。参加された皆さんには、いろいろと大変だったかと思いますが、最後にそういう勉強をしてお互い交流が深まれば大変ありがたいと思っています。

・今井俊博氏

本来、人という生物は動物食ではありません。穀物、つまり人間の歯をみると犬歯という牙があまり発達していません。仮に肉を歯で、牙で引き裂けない。人類が誕生して数百万年ですが、その間ずっと牙は退化し

ていたんです。また、人間は平爪です。動物を捕まえても、自分の手で肉を引き裂けない。

つまり、本来、人という動物は穀物など主体とする雑食性でした。動物性タンパク質をとりなさいというのは、戦後アメリカから入ってきた考えで、ドイツの近代栄養学を源としています。

最近、「快適な暮らし」という言葉がありますが、私は嘘だと思います。

快適とか清潔とかというのは、ここ100年ぐらいの間に間違った衛生観念として、西洋から入ってきたものです。明治のはじめ頃、日本にきた西洋人たちは日本人が非常に清潔であるとびっくりしていました。これは例えばお風呂によく入るということです。日本は湿度が高くて、発酵しやすい風土なので、よく風呂によく入るということです。逆に、日本人は不潔でありシラミがわいていると言われ始めたのは、第二次大戦後のことです。2つの考え方、栄養はたくさんとった方が良く、清潔にした方がよいというのは間違った考え方だと思います。

現在の生活では、人間の体温と大気温度との差がほとんどありません。いつも一定です。高気密・高断熱の空間の中で、空気の湿度・温度を常に一定にしておくエアコンディションの考え方、システムが西洋から入ってきたためです。これが昭和37年頃です。もともとエアコンはアメリカの工場で導入されたものです。温度湿度が一定でないと工場での生産で誤差がでしまうからです。アメリカやヨーロッパのように乾燥した風土、つまり一年中乾燥しているような風土においては、エアコンの中で人間が機械と同じように生活してもそんなに問題は起きません。

日本のようなモンスーンアジアでは、特に夏に高温多湿となるところではいろいろと問題となります。昔から頭寒足熱といわれてきたように、頭の方を冷たくして、足の方を暖かくした方が人間の健康には良いとされています。エアコンでは逆になるので、これを解決するためには室内の空気を攪拌しなければなりません。つまり余分なエネルギーをかけなくてはならなくなり、ますます悪循環となってしまいます。

日本の農村において里山から堆肥の原料となる落ち葉を集めなくなってきたのは昭和40年前後からです。それと柴刈りをしなくなったのも同時期です。時代とともに炭焼きがなくなり、春の山菜もあまり取らなく

なりました。昭和40年を境にしてこれらの事は起こり始めました。

私が最近どんなことをしているかという、3つの地方自治体とともに里地里山のプロジェクトを構想したり進めたりしています。その中で気がつくというか、思い知らされるのが遊休地が増えていることです。特に、いろいろ問題をかかえているのが茶畑ですね。東北方面ではりんご園、九州方面ではみかん畑なども同様です。桑、りんご、みかん等は、かつては外貨・ドルをかせぐために導入されたものです。農業を工業化して積極的に輸出したのですが、これが全部駄目になってきています。

山間地だけではなく、商用地でも同じです。現在の多くの商店街が遊休地と化しています。農業では三ちゃん農業と言われていますが、都会の商店街では三ちゃん商店と言われている状態です。暮らしを支えていく社会が管理社会なんですね。アジア全体にその傾向が広がりつつあります。とにかく現金を握らないとですね、何もできないのです。まず最初にそろえるのが家電製品、次に車を手に入れます。そういうことが、私たちの暮らしを異常なものにしてきました。

日本の風土というのはモンスーンアジアのエリアに含まれています。5月の下旬あたりにヒマラヤ・チベット周辺の大気循環が変わります。それはどうことかという、南インドからミャンマー、インドネシア、マレー地域、インドネシア、揚子江から南、台湾、沖縄、日本というようなところから一斉に雨期が始まり、田植えのシーズンとなります。よく地図を広げて見るとユーラシア大陸全体の中でヒマラヤチベットの世界の屋根から8本の川が流れているのがわかります。この流域がぜんぶ森林なんですね。ユーラシア大陸の中で8本の川の流域以外には森林はないのです。それ以外には複雑な森はないんです。草原や砂漠であったりするぐらいです。この森を切り開いて生活をしているのがモンスーンアジアの住人です。

5月の下旬に気候が一変します。そして約6ヶ月の間は雨期となり、また日本の梅雨は雨期の一形態でもあります。そして、5月の下旬に田植えが始まります。そこでは必ず自然信仰、キリスト教とかイスラムのように一神教ではなく、たくさんの神様がいます。神様だけでなく精霊や鬼もいます。つまり妖怪・おばけ・物の怪や道祖神などがたくさんいるのです。全部共通

しています。アメリカやヨーロッパには、そのようなものは一つもありません。モンスーンアジアの住民の自然信仰、一番ベーシックな自然と一体になるという対象が、つまり森なんですね。

建築費全体に占める設備費の割合が、明治の始めぐらいはだいたい5%前後だったのが、これが第2次大戦後の30年代の半ばぐらいから20%を超えました。今はだいたい35%前後になっています。特にハイテクが入ってきてからの事務所建築では50%を超えています。建築費より設備費の方が高くなっているのです。このような設備付帯建築の最大のシンボルが東京都庁です。そこでは一年中冷房をしています。コンピューターを動かすためです。人間のためではありません。生物としての人間にとって、都合の悪い環境の中で働いているのです。ここでどのような問題がおきているかということ、人間の健康とか生理に悪い影響を与えているのです。その最大の問題は外気温との差が大きくなって、いつも同じ気温、かつ乾燥しすぎて体温の調節機能がなくなってきた点です。その結果として免疫力が低下したりしています。

戦前の在来工法、日本建築は換気と風通しを基本としていました。木とか土とか紙とかの呼吸する建材を基本としていたのです。日照権なんていうのは戦後に言われるようになってきましたけれど、日照権と同様に風通し権も必要なのではないか思います。戦前の場合は、普通に家をつくれば健全な正常な暮らしを送れたはずなのですが、昭和40年前後から違う状況になりつつあります。

換気と風通しを考えた住宅建築を考えることです。使用される建材が、プラスチック・石油系で充満している、いわゆる石油系のもので塗装されているものはだめで、生成りでないとよくありません。木竹土石という言葉がありますが、塗装や接着剤も自然系のものにしていかなければなりません。

住まい手、そこに住む人ですね、暮らし手といいますが、消費者になっています。生活者ではないのですね、消費者になっているのです。悪い言葉で言うと、無知・無経験となってしまうています。価値観、ライフスタイルが違うのです。

生活者は物を生産し消費して土にもどしていく、そういう循環を生活の中で、暮らしの中で持っています。消費者はその一つの側面しか持っていない。工場で

人がつくってくれたものをただ消費するだけです。同時に隣近所とのつきあいや家族のなかのつきあひもなくなっています。

在来工法の住宅ですと大工さんを中心とする工務店といいますが、大工さんの棟梁が全部しきってききました。住む人が自分はどんな家に、どんな暮らしをしたいのかを大工さんに伝えてきました。現在の社会では、これはなかなか難しい事です。20世紀後半の設計士が工学部出身なのは非常に問題です。エンジニアにすぎないからです。それだから新建材しか使えない、木のことじゃまったくわかっていないのです。そのため、そういうものを使った設計ができないのです。

もう一つの大きな問題が木材の流通です。木材の流通というのは、山の森林組合から町の材木屋さんに入るまでに、いくつもの流通の関門があるというか、旧態依然とした流通システムです。ほかの業界でも、京都の呉服屋さんの問屋の仕組みよりはましかもしれませんが…。

オーガニックな食品を販売していこうとしたなら、工場ではなく工房的な仕組みの中で造っていく以外にありません。売られる場所は、スーパー・GMSではなく市の復活が必要だと思います。木材も同じで、工房的な製材と流通、そして市的な売買、消費者とじかに関わってくる流通の仕組みが作られる必要があります。

二ツ井町にきたのは、木ネットの加藤さんに会いに来たのが最初です。木材の産直で言いますと、二ツ井町と徳島の和田くんですね。この2人がもっとも先進的なことをやっていると思います。これを調べに来たのが最初です。それと森の学校です。時間がそろそろきましたので、このあたりで終わりにしたいと思います。

・参加者報告：竹田純一

里地ネットワークの事務局長をしている竹田です。

現在文明の転換期、世紀末にあると言われています。その中でわれわれは何ができるのでしょうか。里地ネットワークでは、現在の社会の行き詰まりの中で、どう持続可能な社会シナリオを描けるか、そんなお絵かきをしたいなと思っています。どんな絵を描きたいかについてはお手元の資料に少し書いてあります。

里地ネットワークは環境庁の里地研究会から生まれ

た組織です。環境を保全した地域づくりというのが形式的な目的というか究極の目的です。

消費生活のみを行っているとうなるかという、今の国際社会では第三世界からの搾取の中で都市生活が成り立っている状況のもと、「国際貿易黒字＝どこかの世界の赤字」ですので、また地球の資源は一つなので、どこかで搾取をしていると思います。それを持続的なものにしていくため我々は何をしたらよいかを考えていく、里地ネットワークはそんなネットワークです。

次に森の学校の変遷を簡単に説明いたします。

平成8年からですから、もう2年半になります。今回で6回目になります。参加する人すべてが先生であり生徒です。また迎えてくれる町の人もすべてが先生であり生徒です。第一回目は二ツ井町の田代地区に入って民泊をさせていただきました。迎えてくれた地元の方々との交流の中で、外からくる人の情報とかアイデアとか、また、地域の中ではそのすばらしさが見えないことが、外から来た人の問いかけの中でわかってきたように感じました。

平成7年11月にはじめて二ツ井町にきました。すばらしいなと思ったところをすこし絵にかいてみました。そして森の学校で皆が旅をする、様々な出会いを重ねて、様々な情報を交換していく、これが森の学校です。その中で二ツ井町に暮らす人たちが、自分たちの暮らしはどうあるべきなのか、また都市との交流はどうすべきなのか、そして風土を活かした町づくり、生業・産業をどうしていったらよいのかを考えてほしいと思います。

森の学校がどんなことをやってきたのか、参加者がどのように感じてきたのかをOHPを使って話したいと思います。(以下、OHPによるもの)

これは、森の学校の開校式です。どんな参加者がどんな思いを持って二ツ井町を訪れたのか、どんなプログラムを体験するのか、そんな思いがわかる開校式です。

開校式を終えて森の学校に出発です。

これは夏でしょうか。森の中に入って、間伐で皮をはいている作業を行っています。森の中に入ると都市から来た人はすごく素直になります。まるで虫のようになります。

これは、キノコのほだぎ取り・キノコの駒うちをし

ぎこちない手で間伐に挑戦



て、また山に戻す作業です。一年半先にならないとキノコにならないので、来年の春、秋でしょうか、森の学校を開催するとキノコが食べられると思います。

これも作業のシーンですが、木の皮をむいている作業です。鋸をいれて皮をむいていくとスーとむけるんですね。みんなおおはしゃぎでやっています。

これは、郷土の森です。白神に隣接するブナ帯と杉の混交林がある場所です。これは、日本一の杉のところでは、杉の周りにぐるっと人がいますが、杉を参加者がかこっているのがよくわかります。

次は、お弁当を食べているところですね。森の中で食べると本当に美味しいですね。森の学校は夏・秋・冬・春と開催したのですが、毎回来る人もいます。季節に応じて二ツ井町の自然の風景が全く変わりますので、来る度ごとに感動が深まります。次が交流のシーンですが、毎回場所を変え、参加者を変え、いろいろな話に花を咲かせています。

西本さんは森の学校の第一回目に参加されて、その

後は奥さんが参加されています。森の学校に参加されてどんな感想を持たれたのか、また住宅メーカーの建築計画の方向転換をされているので、その話も少ししていただければと思います。

・参加者報告：西本金治

森の学校に参加させていただいたおかげで、なんとか好きな木の家を建てることができました。関係者の皆さん、本当に感謝しております。(以下、OHP)

これは、はつかり材木さんですね。ここへ材木を搬入しているところです。秋田の二ツ井町から10トン車で材木が搬入されています。今、材木屋さんは全然活気がなくて、このように10トン車で山から材木を搬入するのはもう全然なくなってしまったんだけど、幸い私も活気づいておりますので、はつかりの社長さんはお話されていました。

日本では大工さんがどんどん高齢化してきて、逆に大工さんの賃金がやすくなってきているのが現状のようです。通常、日当2万5千円ぐらいですが、1万8千円で受けざるをえない。また、平均年齢は50歳ぐらいだと思います。

これは上棟式です。25人ほど見学に来ました。

これは昼時ですね、豚汁をつくりまして、それを配ろうかなという時です。

建前の日は12月22日でした。それから3ヶ月が過ぎようとしていますが、だいたい6～7割がた工事がすすんでいます。これは建前の日ですね。屋根が乗ったところです。木ネットの工法ということで、2階の棧の天井はつけません。見せるという素朴な作り方で昔ながらの工法です。

これは、西側から見たところですが、柱をだして骨組みを見せる工法ですね。作り方としては日本の伝統工法といいますか、軸組工法といいますか、日本古来の建て方なんですけど、まわりと見比べてみるとひとつぼつんと浮き出た感じで非常に目立ってしまいます。調べてみると周りが全部白い家なんですね。東京においては珍しい家だというのは寂しいことなんですけど、これが現状です。

・参加者報告：竹田純一

これまでの森の学校の参加者がどのような感想をもっていたのかを少し紹介したいと思います。(以下、

OHP)

子供の書いた絵なんですけど、冬の七倉山に登った時ですね。竹田溪吾とありますが、私の息子です。小学校三年生の時なのですが、自分が思ったことを絵にした様子です。

「ぼくは高い山に登った…下りはお尻で滑ってきました。杉やブナの木にあたらないようにして」という楽しい体験をしてきたようです。

次は女性なんですけど、能代の木の学校にいった後にどんな報告してくれたかという、「自分のいすを造っていく、自分の体の中に物づくりの経験を形にしていく、というか刻み込んでいく。杉と自分の関係を深めていきたい…」という感じです。

この若林さんという方は大学の2年から参加しているのですが、森を歩いた後はとてもごきげんですよ、という気持ちを絵に書いてくれました。若林さんは、森の学校が終わっても1週間くらい二ツ井町に滞在して森について考えていたようです。

ほとんどの参加者が最後に書いたことは、森のことをこれからも考えること、林業の事をこれからも考えること、今回いろいろな方から受けた様々なやさしさを必ず誰かにあるいは何かに対してお返しをすること、様々な形でかえすこと、家族に伝えたい、今回の体験を周りの人に伝えたい…というようなたくさんの感想を残してくれました。

西本さんには家造りを考えられている最中に、ふとしたことから森の学校と関わりをもつようになった経緯を少し話していただければと思います。

・参加者報告：西本金治

自分の家を探し求めるまでの経緯を話したいと思います。

最初に家をたてようと思った時に、車で自分の住んでいる周辺の3ヶ所ほどの住宅展示場のショールームにいきました。そして、97年3月にあるハウスメーカーと仮契約しました。しかし、どうしても納得できない感じがしているときに、読売の広告欄に森で遊び森を考える学校の記事を見つけて二ツ井町まで来ました。

朝に二ツ井町に着きまして役場の受付にきてみると、にこにこして優しいような方がいらっしゃいました。これが工藤学さんでした。そして役場の中を案内

してもらいました。また、この縁で森の学校が終わってから工藤さんから木ネットの情報を教えていただきました。

7月に柏の木ネットで建てられた小川さんの住宅の見学会にいきました。本当にびっくりしました。今までツーバイフォー等の工法しかないのかなと考えていたのですが、これをきっかけに直ぐに木ネットに施工を依頼しました。

去年の10月12日に地鎮祭をしました。11月22日が上棟式です。大勢の方がお見えになりました。

伝統ある材を使ってですね、我々の家も建てられるということに関しては、本当に感謝しているのです。だれに感謝しているかというともまずは工藤さんです。そして、森の学校の竹田さんです。さらに大勢の方々の協力を得て、家を建てることができました。自分の好きな木の家に住めるというのは、森の学校のおかげで感謝にたえません。

・参加者報告：竹田純一

当初、森の学校が考えていたことを西本さんがそのまま実行してくれました。森の学校に参加してほしい人はどんな人か、最初の企画書に書いたのですが、それは二ツ井町の中でかつて森と関わる生活をしていた人、これから関わりたいと思っている人、都市側・町側では当然住宅に関わる人、設計士さん、工務店さんの方々、家に住んでいる人、買ってきた家に住んでいる人、本来の家に暮らしたい人、生活のことを一生懸命考えたい人、学校の先生、子供たち、かつての住まい方・暮らし方をしているおじいちゃん、おばあちゃんなどです。広く呼びかけて、これからの暮らしというのは、家というのは、住まうというものはどんなものか、森というのはどんなものか、二ツ井町地域の問題、どの部分でも良いのですが一緒に考えていける人が集まってほしいと思いました。学校の参加者の中から真剣に家づくりを、住まうことを、暮らしかたを考えてくれる人が実際に家を建ててくれればすばらしいな思っていました。それが一つの新しい流通の形なわけなんです。森の学校を通じて暮らし方、生活の仕方、住まい方を考える、そこで学んだことから自分たちの暮らしをなおしていくことができれば、これは新しいマーケットであり新しい流通です。それをどこまでの規模でどのような計画で拡大していくのか、こ

のことをみんなで考えていけないだろうかというのが森の学校の当初の趣旨です。

二ツ井の中、米代川流域、またこの広域圏で本来あるべき暮らしに戻していくという意志があるのか、つくっていかうとするのか、いち早くどのように地域内に浸透させる手法を実行するのか、そのことは二ツ井町の中で、または気がついた人がやらなければいけない、必ずしも行政がやらなくてはならないのではなく、気づいた人が組み立てなくてはいけないと思います。二ツ井の中で気づいた人が組み立てないと、時代がどんどん過ぎてしまうからです。

私も全国ネットで動いているのですが、宮崎県の諸塚村ではそのような取り組みが始まっています。二ツ井町で考え出したので、二ツ井町で成功してほしいと願っているのですが、あまり動かないようなら諸塚村で全部ノウハウを出してしまおうかなとも考えています。そうならないよう、早く二ツ井町の地域の中でできないかなと思います。

宮崎県の諸塚村はおもしろいところです。集落の中で、自分たちの集落の計画をすべてたててしまいます。住民の意識・自治は非常に高いところで、ちょうど一年半前から動きがでてきています。

熊本の小国町の話と熊本の水俣の話します。

熊本県の小国町は小さな国、独立国というイメージのところ。何も無い山の中で、何もしないと外との交流が全くないところです。そこには杉しかありません。小国杉ですね。杉を使った地域づくりをどうにかしていこうと考えて、宮崎町長は3つの中核施設を造りました。大きな建物、非常に目立ちます。小国駅というJRの駅がありました。今はバスステーションになっています。そのバスステーションは小国の木でトラス構造で造られ、バス停兼物産館になっています。

もう一つは体育館で、小国ドームと呼ばれています。体育館も木造トラス工法で造られています。何が言いたいかというと、杉の町が本当に杉を活かした地域づくりをするために行った施策から、3つの象徴的な建物を造りました。地域の人みんなに杉の文化を植えつけようとした。

その結果、民間の住宅も同じように杉を活用した家が変わってきました。例えば銀行を始め、今では、ちょっと変わった杉の建築物がある博物館のような感じになっています。これも、宮崎町長の意志なのですが、

象徴的な建物をつくって住民の意識を変えていこう、そんなことをやっています。

次は熊本の水俣なんですが、水俣でやったのは地域の人が地域の中を回って、自分たちの地域に何があるのかを調べてマップにしました。ニツ井町では200人委員会が行われていますが、その委員会はその後どうなったのかなというのが私の疑問です。

水俣では山から水が流れる、その水が川に流れ込む、わき出た水が家に入り流しで使われて、その水を池に流し池で鯉を飼い、川に流す。これが水のゆくえなのですが、水の部分を全部調べています。もう一つは地域の中にどんなものがあるのか、いわゆる「あるもの探し」です。

これらの地域では、昔からの暮らし方、住まい方などをもう一度発見しなおして、自分たちはどういう地域をつくっていききたいのか、どういう暮らしをしたいのかを考えています。

何がしたいかという、森の学校の地域版を地域の中でつくれないのだろうかという事です。ニツ井町の方々が本当に集落単位で自分たちの集落をどうしたらよいか、そんなことを考えてほしいと思います。熊本の小国ドームを見せたのは、町の公共施設はすべて杉であるべきと考えて実行している地域があるのだということです。よその材で建てるのはおかしいと考えること。その点で町営住宅が秋田杉になったのは喜ばしと思います。

この庁舎も杉を使っていますが、もっともっと真剣に杉の使い方・活用の仕方があるのではないかなとも感じました。ニツ井町では、秋田杉という銘木中の銘木、南の地域と比べて非常にしまった材の杉をもっています。この木の特性を活かして本当にその木が使われるあるべき姿で活用される、そんな構造をはやく立ち上げるべきではないかなとも感じ、この学校を企画したのですが、さてこれからどうするべきなのか、これは後ほど田中さんのコーディネートのディスカッションで少し考えてくれないかなと思います。

・スライド上映：鈴木有

一昨年(1997)の4月に秋田にきました。私のふるさととは滋賀県近江、琵琶湖のあたりです。自分の人生設計の中でも、このような土地に来るとはまったく考えもしませんでした。でも2年間たって本当にきて良かったと

思います。外交辞令ではなく心から思っています。理由は2つあります。

一つは田園風景です。地勢がゆるやかですね。急な山がなくて、杉の造林の林に雑木が混じっていて、それがゆるやかに田圃や畑とつながって、林業と農業が非常に近いところにあります。まさに田園風景。今日のテーマでいうと里山ですね。この見事な風景に心惹かれました。特にニツ井町周辺が非常に優れています。

二番目は人ですね。私は滋賀県で産まれて、京都に行きまして十数年暮らして、金沢では二十数年いまして、そしてここにやってまいりました。

以前は、顔に儲けとかお金とかが全面に浮き出た人たちと出会ってきました。すなわち自分の地位とか名誉とかが表にでている人たちとつきあってきました。ここへきて、そのような表情が出ている人が少ないと気づきました。

ここでは、いい暮らしをしたい、いい仕事をしたい、時間に追われず、自分の生活を味わっていきたく思う人たちにたくさん出会ってきました。

来た当時からニツ井町の人たちとつながりがありました。それで自称、ニツ井町の応援団になりたいと思っています。ゆるされれば、あと6年で定年ですが、その後は人生の3分の1ぐらい、この地域にすごせるような場をつくりたいと思います。そのときに地域とつながって、その人たちの役に立てるようになりたいと真剣に考えています。

先ほど竹田さんが二つの結論を言いました。

一つは地元産のものをちゃんと使って、町づくり、少なくとも公共事業をやるべきではないかということ。2番目に森の学校でやったことを地域の中で行くこと、地域の中でなぜできないか、地域の人が地域のことをもう一度見直して、その価値を見つけ直すのではないかということです。私の話は、その2つの話と何らかのつながりがあるかと思います。

2年間にニツ井町に訪れたのは、ほんの数回ですが、いわば「よそ者」の目から見た、ニツ井町の魅力をすまいと町なみから話をさせていただきたいと思います。これから地元のみなさんが、良い町をつくるために何を考えるかが大切か何か参考になれば幸いです。

(以下OHP)

きみまち坂の周辺はすばらしいです。七倉山がせりだして、さすがの大きな米代川でもこの山をつつ

きることはできませんでした。ほとんど360度に近いかたちで蛇行しています。これらの風景は二ツ井町の財産と言うより、日本の大事な風景としての財産です。こういう風景は日本の中でもそんなに見ることができません。自然の地形がじつに巧みにこういうものを作り出しているのがわかります。同時に人の営みがすぐそばまでできていて、実に調和しています。日本の代表的な里山です。

ここへ来てようやくわかりましたが、杉の林がやはり林業の原点であります。

これは、木ネットの加藤さんからいただいた写真ですが、人間の手が入った杉の造林の林に、そこに自然の植生が雑木として入っています。その混在した林の構成、非常に地形が穏やかな風景の中に、それがすぐに田圃や畑とつながって、その境界が非常に緩やかであるという点。まさに人の暮らしと自然とが共生している。そこに風景に非常に心がひかれます。これを見ただけで秋田にきて良かった、二ツ井町とかかわりをもてて良かったと、感動を覚えます。

これはこの庁舎の屋上から撮った町の風景ですが、あまりはっきりしていない写真ですが、それでも赤い屋根、青い屋根、黒い屋根、白い壁、色とりどりで形もばらばら、いかにもこれが周りの風景となじんでいないというふうに感じとれます。

はさがけの光景、刈り取られた稲の株と残った水、後ろの山、畦のあちこちにある野草、このような調和した風景があちこちにあります。しかし、その奥にある町の風景が貧しいと言わざるを得ません。地方の風景は、必ずしもこのような風景ではありません。たいていは昔の伝統の町並みを残しております。

一つには非常に寒い中で暮らさなくてはならない事が影響しているのではないかなと考えています。つまり、夏の涼しさよりも冬の暖かさ、便利さを人間が追うようになってきたからです。いままで暮らしてきた民家の伝統をもった構造を全部壊してしまって現代風の便利でエアコンなどの暖房器具で部屋を暖めて、湿度さえコントロールできるような住まいを私たちが求めるようになったから、このような町並みができたと思います。形も貧しいし材料も貧しいですね、新建材はたしかに便利ですが、先ほど出てきました竹、土、石と比べると、いかに貧しいかがわかります。

町の中心は今風の町です。どちらかというと、けば

けばしいというのがこの町の現状です。これは二ツ井町だけではなく、日本のあちこちでこのような町がつくられています。もう少し町の中心部にはいりましても、同じです。緑は十分にあるんですね、ただその緑が十分に活かされていません。その前に建っている建物、建築の専門用語で看板建築と呼んでいるんですが、家自体が一つの看板のように何かを主張しています。つまり、商売、儲けるということを前面に出しています。人間にもそのような表情がでると何かいやしいという感じがしますが、建物の場合でも卑しさ、貧しさを感じ取ってしまいます。しかしそんな表情ばかりではないんです。

これは病院ですが、二ツ井町が持っていた伝統の形をそのまま残しています。窓枠には残念ながらアルミサッシが入っていますが、屋根の形に風格があります。屋根の取り回しにも大工の心遣いが感じられます。

ちょっと見えにくいですが、雨戸の戸袋に見事な彫刻が表面・まわりにしつらえられています。恐らく、住まい手がこのような家を造りたいという熱い思いを持って、大工棟梁につくらせたのでしょう。

駅前の旅館ですが、元の形というのはきちんと残っています。これも残念ながら前はアルミサッシになってしまいました。開口部の作り方、奥のほうの取り合わせのデザイン、このようなところに大工棟梁の腕、デザインを十分に感じ取ることができます。それに比べて広告のための看板、あるいはブロック塀・石塀、植生などの扱いが家本体に比べて大変に貧しいことがわかります。

二ツ井の家は約2日間かけて回らせてもらいました。時代を追って3つぐらいのタイプに分けられます。これは伝統の家の話です。

第一番目は、「切妻」と呼ばれる大屋根を持った家の形ですが、これは日本の民家の原点をもった家です。つまり勾配屋根が2方向に流れていく、端がびたりと切られていますが、このでっぱりを「けらば」と呼びますが、このけらばの出が非常に深い。

秋田県で初めて、こういう造りを見ましたが、妻の部分に大きな梁が飛び出しています。秋田の一つの伝統の造りになっているのだろーと思います。これが白壁と縦横の木の使いかたと、ここで思い切って出したでっぱりと、そこに一種の立体感を醸し出している。優れたデザインだと思います。おそらくこれは、日本

の民家は屋根が弱い、屋根の面を補強するために奥の方まで梁を通して、構造的な工夫がデザインと結びついて優れた造形になっているのではないかと思います。

二番目のパターンは、「寄せうね」といいまして、切妻だったものが両サイドの部分が斜め方向に切り取られまして、ここのところにも屋根が出てきています。屋根を二重にすることによりデザインに重厚さを出します、同時に本体にあたる部分はしっかりした気組みにして、ここは変えません。しかし長年住んでいると住まい手がかわってライフスタイルも変わってきます。家族が増えたことによる空間を増やすことや座敷を少し広げてみたり、そのような対応をできるような一つの仕掛けではないかと考えております。

三番目のパターンが入母屋です。今ちょっといい家を造りたい人はこの屋根の形を選びます。残念ながらこの家は非常にいい家なんです、もう使われていない、無人になっていました。入母屋は非常に見事な曲線を描いた屋根をつけています。この部分に白い漆喰の壁を残して、あとは水・雪・雨に備えて板張りで造られています。

だいたい3つパターンの家がございます、探すとあちこちにありますが、本当にびっくりするぐらいあります。恐らくみなさんは、日常の風景の中で埋没しているのではないかと思います。

100年以上たった民家がこれです。大屋根の下に下屋がしっかり4隅にまわっています。ここから1階の部分へ明かりをとっています。ここに庇を出して、ここを出入りの場所としながら、建物に表情を与えるデザインになっています。しかし、住んでいる方が高齢者で手入れがそれほど行きとどかないし、これが朽ちていくのがいかにも残念です。

基礎の部分が栗ではないかと思うのですが、一回くらいは取り替えているかもしれませんが、100年以上立っていますがほとんど朽ちていません。水に濡れて少し苔が生えていますが、腐り・腐朽はほとんどみられません。これを地元の田中さんに見てもらおうと地元のゼオライトという石が利用されていました。石の機能として全く健全でした。非常に長寿命の家を支えてきたことがよくわかります。

昔の民家は地元の材を十分に使って、地元の家を造りこんできました。だから自立することができたので

す。里山で自給自足の体制が少なくともとれるように努力をする、その努めをしなければならないという意味を持っているのだと思います。

優れた施主がやっぱり優れた大工・棟梁を育ててきました。それが、日本のごく普通の両者の関係でありました。どういう家をつくりたいか、どういう材を使いたいのか、どういう暮らしをしたいのか、こういうことが施主との間できちんと定着していた、ひとつの見識がありました。それを元に大工・頭領がきちんと仕事をしていたのです。

二ツ井町は日本の伝統的な民家ばかりではなく、雪国で典型的な土縁、土の庇というおしゃれな空間を持っています。西洋の建築にはみられない空間です。この空間が季節に応じて使い分けられます。冬の間の作業の空間、物入れの空間でもあります。雪国特有で青森から鳥取までありますが、秋田のものが一番優れていると思います。

町史をひもといてみると、明治33年6月と書いてありますが、現在の本町通りの町並みです。切妻の屋根がずっとつながっています。今と比べると随分と不便かもしれないけれども、町なみはずっといいです。それぞれが大きくて風格があって、町全体に一種の調和がありました。恐らく当時の人は、自分の家を自分の考えだけで建てようとしないう、町並みを考えて調和をはかるようにして、なおかつひとつひとつの家の個性を出していったのだと思います。

今度は昭和です。昭和22年に二ツ井町は大きな水害があり、大きな被害を受けました。その当時の町並みですら、今と比べてはるかに風格があったと思います。

橋本邸と書いてあります。昔の方はこの名前を知っているのではないのでしょうか。花街、遊郭だったんだらうと思います。当時一番お金が入るところです。豊かな家を造ろうとしていたのではないかと思います。非常にいいデザインで造られていますね。2階の欄間の手すりのつくりなど、京都・大阪・江戸に比べると繊細さはありませんが地味らしい剛胆さがあらわれております。これだけのものを当時の人はつくるだけの力量を持っていたし、それだけの町をつくってきました。

戦後の町づくりは環境開発型でした。どこかに大きな拠点を作って、それを梃子にして町おこしをしようとしてきました。しかし、いろんな点で行き詰まって



きました。不景気は環境面からは大変幸いなことでして、お金をもうけなくてもすみます。つまりエネルギーをつかわなくてもすむという時代になったわけです。日本人がもう少し質素に暮らそうと思えば、今の収入があれば十分健康に暮らしていくことができるのです。そういう町づくりを考えて行かなくてはならないのです。

全国あちこち町を見せてもらって、その経験の中で3つのことがわかりました。成功していると思われるところは、どの町でも民と官との共同作業がうまくいっていることです。これが第一の教訓です。二番目がそれぞれの地域が受け継いできた大事な伝統的な財産、主に住まいですが、これを再発見してもう一回はぐくみなおして、次の時代へ伝えようとする、はっきりした目的意識を持ったプログラムがあるということです。三番目は、決してあせらない。すぐに結果をもとめようとしない。時間をかけてゆっくりと地味にやっていたいこうとしている点です。この3点が共通しているように思えました。

結局、町づくりというのは住まいをつくることではないかと思います。それが町並みにつながって行って、いい暮らしにつながっていくのです。本当におやりになるのは地元の方、地元の方が自分たちのために次の世代にいい暮らしを伝える、つくっていく。その思いがあって初めて成り立つものだと思います。二ツ井町にそのことを申し上げて、約2年間応援団の気持ちを持ち続けましたけれども、残念ながら、まだそれに答えて動きはじめたかなーという部分をそんなに強く感じておりません。でも、これからでしょうね。それを期待します。

今お見せしましたように二ツ井町にはきちんとした

財産があります。奥の方の林から始まって町まで、きちんとした伝統の財産があります。それからいい人が育っています。あとは想い、どんな町をつくりたいか、どんな町を次の世代に伝えたいか、そして行動の一步です。それを応援団として強く期待して、私もその一員に加われたら幸いだと思えまして、終わりたいと思います。

どうもありがとうございました。

意見交換

・田中

今井先生からは住まいという面から、これからどうするのという全体的なまとめかたであったと思います。竹田さんからは、どれだけ地域と密着しながら都市と地域をどのようにつなげていくのかという問いかけだったと思います。

西本さんの話からは、住まいというのが非常に大事な事業だなと感じました。鈴木先生からは、二ツ井町の建築物がこんなにいい物であったのかと再度見直しをしないといけないと気づかされました。

何か質問したい方、もっと聞きたい方はいらっしゃいますか。

・会場参加者

農林水産省に40年ほど勤務していたものです。

当時は都市計画をする仕事をしていました。森で遊び林業を考える学校というのは、不勉強で昨年まで知りませんでした。

さて現在、所有する山林の所在がわからないような地主・山主が多くなってきている現状をどうお考えでしょうか。また、最近木材を使用する棟梁・大工が少なくなってきました。設計屋さんが責任を持ってこれから大工の人を育ててほしいと思いますが、いかがでしょうか。

・田中

林業の町として山があって木があるけれども、自分の山の所在がはっきりとわからないという問題ですね。行政との関わりの中で山の立地境界は二ツ井町の場合、まだはっきりとしていませんね。

山の境界をきちんとする計画は町ではあるのですか？

私もその件について2～3年前に役場の方に聞いたのですが、そのうちにという返事を聞いただけで、まだそのままの感じのようです。

木材があって住宅がきちんとしないという件に関しては、どなたかお答えを。

・鈴木

後ろをむいて考えれば戦後の日本が木造を捨ててきたという経緯があります。昭和40年代で木造に関する講義が消えています。今かろうじて専門学校において大工を養成する課程があるぐらいです。4年生大学ではほとんどありません。木造にほとんど目が向けられなくなってきて、そのつけが回ってきた感じです。にも関わらず、木造の住宅は着工の半分以上あります。しかも在来工法に近い形でですね。木造を捨ててきたんだけど大工・棟梁が支えてきてくれています。でも、もう限界なんだというのが先ほどのご質問の趣旨だと思います。

前を向いて話すと、木ネットに似た試みがありこちらで生まれてきています。産直の仕組みができてはじめています。それを活かそうということで、大工を養成する塾があちこちにできてはじめてきています。また、職人学校も増え始めてきています。富山県に職芸学院があります。いわゆる大工・職人をきちんと育てようというプログラムです。金沢には職人大学校があります。一流の棟梁に普通の大工が師事してもう一度学んでいます。

地下水脈が少しずつ流れ始めている感じがします。21世紀はその水脈が強くなる、強くならないと日本という国はありえないと思います。明日を信じて自分たちにできることに少しずつ参加することが大切です。なんと言っても施主が変われば世の中がかわるんですね。

・田中

私は町営住宅を伝統の大工の技、金物を使わない設計活動を進めようとしています。最近、正直言わせて、大工さんが大工さんになっていないと思います。どうも大工さんが職人ではなく、生産者側、あるいは物をつくればいいやという考え方になってきているように感じます。今の伝統的な技術は、あと10～20年た

てば全部技が消えてしまうでしょう。町営住宅ではその技術が見えるような構造体になっています。それを今の、そして次の職人さんに伝えたいと思っています。

木の見方、木の扱いかた、20～40歳の大工が、若い大工が60歳の大工さんの技術を聞いて盗むんですきちんとやれる大工さんが二ツ井町に残ってもらいたと思います。20～30年後に二ツ井町の大工の技術はすごいと言われ、大工も残って、他の地域より非常に仕事があるといわれるようにしたいものです。

・今井

繊維素材がなんで乾くかという風で乾くんですね。風というものを現代風にいうと通風換気といいます。これをまったく拒否したのが建設省の考え方で、高気密・高断熱であります。いまだにこの考え方を捨てていません。

もう一つの問題は国の制度だと思います。最大の問題は建築基準法と消防法だと思います。これを抜本的に変えなくてはならないが、一度決められた制度を変えと言うことは非常に大変なことです。ですからゲリラ的にやらないと駄目ですね。そういう実感です。

もう一つが、住宅だけではないのですが、自然素材をどのように使うか、素材はそのままでは材料にならないんですね。素材を材料にする一次加工することにノウハウがあります。塗装の面で言うと、ドイツのアウロは成分的には完全なんです。だけど日本の風土にあわない、乾かないんです。そういう問題があるんですね。木の素材と塗装とは違う。そのへんをもっと追求しなくてはならない。

モンスーンアジアでは絹ですね。あらゆる天然素材の中でもっとも調湿機能に優れています。モンスーンアジアでもっとも適している天然素材は絹と麻です。麻は植物繊維です。水に強い素材です。木綿とウール素材の衣服は日本の気候にあまり適していない。コットンは汗をかいて冷えてしまうと風邪をひいてしまうんですね。乾燥しているところでは適しています。

絹は紫外線をカットしてくれる。絹は来てる間に黄ばんでしまいますが黄ばむから良いのです。紫外線をカットしてくれるから黄ばむのです。そういう生物学的な機能を持っているのです。

・田中

今は建築基準法見直しということで2～3年前から改訂作業がすすんでいます。これまでの建築基準法では数値でがんじがらめにしてきました。今は住宅工法は78工法ぐらいはあるだろうと言われています。(2年前の情報)それ以上に今はもっと増えているでしょう。

数字的に建物をがんじがらめにするのではなく、性能規定に変わりつつあります。数字的に建物を捉えるのではなくりつつある傾向にあると思います。

町営住宅に対する思いとかを簡単に話したいと思います。

町営住宅の敷地を見ていい景色だなと思いました。敷地内に水路を造って住宅の中に水を流したいなと考えました。これからのことを考えて、ソーラーパネルの活用や雨水も積極的に利用したいなと思いました。

地域の人のこれからの生活スタイルはある程度の自給自足型だと思います。町営住宅の中に畑を作りたい、緑は当然のことです、一番大事なのが町づくり、地域づくりの集合体として一つの形を示したかたと思っています。

ドイツの基準に適していると言われるラルマークのついたクロス、エコロジー・クロス、それから普通のクロス、普通のビニルクロス、それから木創のクロスの5種類をリトマス試験紙を使用して燃えたときに出る煙を調査してみました。ドイツの基準に達しているとの記載があるのですが、ラルマークのクロスがpH 2～3で、エコロジークロスと呼ばれているのが、やはり2～3です。布クロスがだいたい4ぐらいです。ビニルクロスは煙がモクモクと出てPHは1です。木創のクロスが6～7です。これは皆さんの前で実験をしました。皆、びっくりしていました。

町営住宅の場合は、内部・外部の塗装は植物油を使用しています。オイル系、シンナー系は使用していません。合板はノンホルマリンタイプを使用しています。畳は、防虫・防腐剤を一切使用していません。

合併浄化槽は普通20ppmの排出基準ですが10ppmまで落としています。本当はもっと低くしたかったのですが予算の関係でここまでとしました。しかし、公共の建築物の中で10ppmまで落としているのはほとんどないのではないかと思います。また、地域の材料、木材を使用しています。地域のゼオライトや地場の木サッシ、そして地元の大工さんをお願いしています。

なるべく塗装をしないのが本来の木造の使い方です。外壁なんかも色を付けない方がよいのです。今回の町営住宅の天井も塗料は一切使用していません。

そのぶん、香りは永続的に続くと思います。

・会場参加者

質問というか要望なんですが。

里地ネットワークの活動が全国点在状態ですね。

できれば、エリアでしかけるのがあってもよいのかなとも思いました。

米代川流域には森、田圃、住まいなどいろんなテーマでいろんな実験ができるのではないのかなと思いますが、その辺の考え方はどうなんだろうと思いましたが、いかがでしょうか。

・竹田

今年度は集落を中心に活動しています。全国どこにいても中心は集落です。流域による取り組みは天竜川一ヶ所を考えています

来年度考えているのは、集落からもう少し広域圏、水系を見ています。いきなり水系でいっても、集落の中でどのような営みがあるのか、手元に7～11ヶ所ありますが、それぞれ風土の特徴にあった地域づくりにも違いがありますし、生業も全部違います。

全国を歩いてみて、例えば11のパターンがあることをみんなに伝えていきたいですね。全部違うんだと。だから流域で考える場合、個々の集落でどのように考えるのか、それを踏まえて流域ではどのような展開をしていくのかを考えていきたいなと思います。

小国のドームは、建築基準法では承認されません。ですが、地域づくりのために3年がかりで小国における小国杉を使用したトラス工法の住宅の承認を得ています。ほかの町が取り入れようとしても実験をしないと駄目です。

二ツ井町産のゼオライトと杉とを活用した取り組み、その情熱があれば特例として認められるのではないかな。それを支えるのが大工・棟梁の技術であり、それを支える杉の町のありかたじゃないかなと思います。現にやっているところがあります。私は二ツ井町が大好きです。ぜひともやってもらいたいと思います。

・田中

それでは、最後に西本さんから、竹田さんの言われた杉あるいは棟梁あるいは技術、そのへんのところから感じられるところをお願いいたします。

・西本

今の日本の現状を考えると、やはりもっともっと我々が木を使って家を建てる必要があるのではないのでしょうか。日本人が日本の材で家を建てられないのはなにか間違っていると思います。どっかがおかしいと思います。なんとかやればできるんだと、我々の同世代または後輩の世代に示したいと思います。

・田中

森の学校というものの、里地ネットワークの基本的な考え方をもう一度整理したいと思います。

地域と都市を結ぶための役割を里地ネットワークがしています。物あるいは人の交流ができてきます。都市に足りないものをこちらから提供する。逆にこちらに足りないものを都市からいただく。そういったネットワークを日本全国に広げよう。その中で地元にいる二ツ井町の住民はどうしたらよいか。成功しているところは官と民との協同作業が非常にうまくいっています。民間はなにをするの、行政はなにをするのということから入っていかないといけないと思います。官の役割、民の役割、それぞれ5分5分かなと思います。年度目標をこれから定めて、ある程度行動していかないと、いつまでたってもこのままの状態で行くのではないかなと思います。そういう機会を数多く持ってもらって、この町をよくしていきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

総 括

本シンポジウムでは、地元からはもちろんのこと、関東や遠く熊本県水俣市からもかけつけ、総計50名ほどの参加者となり、予定終了時刻を過ぎても報告者の熱気のこもった真剣な話は続けられた。このシンポジウムを通じて、二ツ井町の持つ可能性と問題点とが、いくつか浮き彫りにされた。今後の活動如何によっては、二ツ井町の持つ潜在的なエネルギーを発揮できる

かが問われることになる。

二ツ井町では官民協力のもと平成8年より森の学校が開催され、森で遊び森を学ぶというテーマで都市住民と地元住民との交流が続けられてきた。今回の報告者の一人である西本氏のように第1回目からの参加者、いわゆる二ツ井ファンも少なくない。また、西本氏は森の学校を通じたネットワークを通じて秋田県産の杉をつかった在来工法による住宅を建てるまでにいたっている。このように、家づくり・住まい・暮らし方を真剣に考え、実際に行動する方が森の学校の参加者から出たのは、本企画の最大の成果であると言える。

さらにどうすれば第二、第三の西本氏を見つけ、育てていくことができるのかを真剣に考え、討議することは林業の町の活性化につながる重要なポイントだと思われる。必要なことは、さらなる一步を踏み出すか否かである。すなわち、町の一つのイベントととしてではなく、町づくりの一環として本格的に取り組み、真剣に地域のこととして本事業を戦略的に位置づけ、かつ継続して活動していくことが今、必要とされているのである。

同時に、地域住民の協力体制が必要不可欠となるため、住民及び行政が一体となって林業の町として町の将来ビジョンを示す必要もあるだろう。

二ツ井町の可能性はその豊富な潜在資源である。特に外から見た貴重な資源とは何であるかを森の学校の参加者を通じて探り出し、該当する地域資源を積極的に活用した町づくりが活性化に至る一つの手法であるといえる。

地元の資源を活用した町づくりこそが、住民の自信や誇り、郷土愛につながり、外部へと積極的に情報発信することにつながっていくことであろう。そのようになればより多くの二ツ井町のファンが訪れることも十分に期待できる。あわせて、地域内の人づくりも平行して行うべきである。この点に関しても民間の役割を補う形で行政のサポートが必要不可欠となる。今回のシンポジウムでは大工・棟梁の技術を伝承させることの重要性に気づかされた。物として残らないソフト資源だけに、技が途絶えると言うことは地域の魅力を半減させるものでもある。町営住宅のような事例を増やして、質の高い大工・棟梁を育ててほしいと強く願うものである。

イベント・募集案内

越後妻有アートネックレス整備事業

●「越後妻有 8 万人ステキ発見」 写真と言葉のコンテスト

越後妻有（新潟県十日町市、川西町、津南町、中里村、松代町、松之山町）でステキと感じられるものを写真と言葉にして下さい。短歌や俳句、料理などでも応募できます。これは、圏域のみならず全国に応募を呼びかけ、妻有のステキ（地域資源）を発見してもらい、交流人口増加を図ろうとするものです。

応募期間：平成11年7月31日まで

●99英伸三写真塾

雪どけから始まる妻有の春、妻有の喜びを「田んぼ」をテーマに発見し、撮影します。田んぼの価値等をプロ写真家との交流から学びます。また、地元の方々と交流による田植えや伝統食づくり体験を通して、食と農のいま・これからを伝えます。

日時：5月22日（土）～23日（日）

場所：川西町霜条 松葉荘

参加費：14,000円

（宿泊・食事・交流会・現地移動バス費用含む）

募集人数：50名

問合せ先（共に）：

十日町地域広域事務組合企画振興課内

越後妻有 8 万人のステキ発見実行委員会

TEL：0257-57-2637 FAX：0257-57-2285

四万十楽舎オープン

村の過疎化をストップさせ、子どもたちの元気な声を呼び戻そうという小さな村の熱意が、四万十川のすぐそばの休校中の小学校を自然・文化センターに変えました。

ここでは自然観察、地域の伝統的・個性的文化との出会い、農林漁業体験や村民とのふれあいなどを通して、「健康と生命」を「楽修」する新しい旅として、四万十川の自然や文化、村の人とのふれあい等の体験メニューを用意しています。

場所：高知県幡豆郡西土佐村

問合せ先：四万十楽舎 0880-54-1230 FAX

E-Mail hiroto@mb.gallery.or.jp

<http://www.gallery.or.jp/~hiroto/gakusha.html>